

清沢洌のモダンガール論

On the Modern Girls by Kiyoshi Kiyosawa

佐久間俊明

SAKUMA Toshiaki

はじめに

①モチーフと論理

②1920年代日本社会における思想的位置

おわりに

【論文要旨】

本稿は、『モダンガール』[金星堂, 1926]等, 1920年代における清沢洌(1890-1945)の著作に収録された一連の女性論・婦人問題論を「モダンガール論」と捉えて検討したものである。

①においては, 清沢の「モダンガール論」を「思想」としてのモダンガール論と「ハルピンの夜の女」にみる日本社会批判の二つの側面から明らかにした。前者は, 〈モダンガール〉という理念を切り口に, 日本の女性を封建的な習慣や道徳から解放することを目指す議論であり, したがって, 単なる女性論ではなく, 婦人問題を社会問題と捉え, その解決を図ることにより, 日本社会の民主化を目指した議論であった。一方, 後者は, ハルピンの「夜の女」を切り口に, 女性を圧迫する日本社会の現状と日本人のメンタリティーを徹底的に批判したエッセイであった。

②においては, 清沢のモダンガール論を1920年代日本社会におけるモダンガール論及び女性解放思想/運動の中に位置づけることを試みた。前者に関しては, その議論が, マルクス主義者や保守的知識人とは異なり, 理念的にモダンガールを捉えようとしたために, 実際に出現した「風俗」としてのモダンガールを批判するものと位置づけた。一方, 後者に関しては, 廃娼運動とその思想における位置づけ, 清沢の青鞥社の「新しい女」とノラ批判の意味するもの, 「良妻賢母思想」との距離を解明し, その議論が男女間の政治的経済的・道徳的不平等を解消し, 日本社会の民主化を目指す議論であることから, 女権主義に立つものであると指摘した。

最後に, 清沢のモダンガール論が, 彼の個人的体験に基づく深い問題意識によって展開されたものであることを明らかにした上で, その特徴と問題点をそれぞれ指摘し, そこにみえる「心構えとしての自由主義」の特徴を明らかにした。

【キーワード】清沢洌, 1920年代, モダンガール, 「心構えとしての自由主義」, 女権主義